

一沈める美-民窯百撰

平成14年7月21日(日)～9月8日(日)

瀬戸(美濃)・唐津にはじまる近世陶磁の系譜は、やがて伊万里に代表される肥前磁器へと発展しました。近世陶磁の幕開けとなった肥前の作陶技術は、江戸後期から幕末にかけて全国に拡散し、地方窯の成立を促します。これらの地方窯は、飯茶碗・徳利・甕・摺鉢など、一般庶民のための日用雑器を生産する「民窯」が主体でした。諸窯の多くは、換業期間が短く、現在では「幻の陶磁」と呼ばれるものも少なくありません。肥前陶磁の影響を受けて各地に花開いた民窯の名品をお楽しみください。

悪戸焼【あくど】

文化文政頃、石岡林兵衛が青森県下湯口村扇田(現弘前市)で始めた日用陶器。のち同野原(野木和・野木屋)、同青柳へと窯を移すが、大正8年(1919)廃窯。銘印に「扇田」「扇山」「津軽」「ツカル」「青柳」「石岡」など。末期には、茶道具・染付磁器も焼成した。



[岩木山] 銘灰釉盃

個人蔵



白磁盃

個人蔵



灰釉盃

個人蔵



灰釉皿

弘前市立博物館蔵



鉄釉抹茶茶碗

弘前市立博物館蔵



鉄釉抹茶茶碗

個人蔵



鉄釉天目茶碗

個人蔵



鉄釉瓢

弘前市立博物館蔵



鉄釉水指

弘前市立博物館蔵



前田照雲作 [遠島] 花生

弘前市立博物館蔵



灰釉蒔書蘭引

弘前市立博物館蔵



灰釉蒔書湯通

中里町立博物館蔵

大堀相馬焼【おおほりそうま】

大堀焼。福島県浪江町大堀の半谷休閑の下僕左馬が、相馬中村で製陶法を身につけて1690年頃開窯、駒の絵を描いて評判をとり、以来村をあげて徳利・土瓶など種々の日用陶器を生産した。継新後は衰退したが、明治6年(1873)頃松永政太が考案した鯨焼土瓶(鯨肌焼)がアメリカへ大量に輸出された。これは勿来土瓶・勿来焼とも呼ばれた。



鯨焼土瓶

個人蔵

埴焼【つづみ】

旧名杉山焼・僊(仙)台焼。仙台市杉山台原で、元禄年間(1694)に江戸の陶器師上村万右衛門が始めた陶器と土人形。その後何度かの断絶を経て、寛政年間(1799)に佐藤九平治が堤町に窯を移した。また庄子義忠は1855年に製陶を始めたが、三浦乾也に教えを受けて茶器を焼成。名を乾馬と改め初代となり、当代は4代目。



海鼠釉大壺

個人蔵

清水焼【きよみず】

京都東山の清水・五条坂で焼かれた陶磁器の総称。慶長年間(1600)に開窯した。初期には音羽・清閑寺・清水坂などで製陶され、元和年間には優秀な陶工を輩出した。江戸中期以降発展をとり、文化年間磁器を量産してからは最大の京焼生産地となった。



灰釉梅文蘭引

個人蔵

瀬戸焼【せと】

愛知県瀬戸市を中心とした地域に分布する東日本最大の窯業地。窯の歴史は中世以前に遡るが、文化4年(1807)加藤民吉が九州より磁器の製法を修得して以来大きく発展し、良質の染付磁器を大量に生産。瀬戸物が陶磁器の代名詞にまでなった。



灰釉唐草文猪口

個人蔵

[引用文献]
下中 弘編 1984 [やきもの事典] 平凡社

中里町立博物館蔵

二彩唐津【にさいからつ】

白土を刷毛目した上に鉄と銅緑で松などの文様を描いた唐津焼。庭木山・弓野山・小田志山・焼蜂・椎の峰山・黒辛田などの民窯系諸窯で焼かれ、特に松絵が喜ばれて量産された。



刷毛目茶碗

個人蔵



二彩唐津松絵壺

個人蔵



打刷毛目水指

個人蔵



二彩唐津徳利

個人蔵



二彩唐津「高麗谷」
銘大徳利

個人蔵

長与焼【ながよ】

長崎県長与町嬉里郷で焼かれた磁器。創業は寛文7年といわれ、正徳2年間に波佐見陶工が再興。製品は日常食器が大部分で、有名な長与三彩は寛政4年以後に焼造。文政3年閉窯。のち弘化2年渡辺作兵衛が再興して日用陶器を焼くが、安政6年廃窯。

小代焼【しょうだい】

別名竜原焼・玉徳焼。熊本県南関町宮尾の小代山麓で、寛永9年豊前より移封された藩主細川忠利に従って入国した牝小路・葛城の2陶家により始められた陶器。製品は鉄釉に白濁釉を流し掛したものが多く、日用雑器のほか茶器もある。「松風」「牝小路」「葛城」「玉徳」などの印銘がある。



三彩猪口

個人蔵



鉄釉茶碗

個人蔵



鉄釉火鉢

個人蔵



鉄釉船徳利

個人蔵



鉄釉掛花入

個人蔵

八代焼【やつしろ】

別名高田焼・平山焼。熊本県八代市(旧高田村)で茶陶を中心に焼いた肥後細川藩の御用窯。豊前上野より細川忠興(三斎)の移封に従ってきた陶工専修が、寛永10年奈良木町の木下谷に開窯、その後平山新町に移窯。3代渡辺太郎助(号百芝・喜楽)が白土象嵌の技法を完成させる。明治25年頃日奈久東町へ移窯、現代に至る。

苗代川窯【なえしろがわ】

薩摩焼の一系統。慶長4年串木野窯を開いた朴平意らは、のち苗代川(東市来町英山)に移り、藩の保護を受けて慶長10年元屋敷窯を開く。以後堂平窯、玉本松窯、打通窯、ウチコク・ソトク窯、磁器の南京皿山窯、藩用として御物窯などが築かれ、明治維新後は共同窯・個人窯として現在に至る。釘彫・貼付の半胴壺などの黒もんの日用雑器と、金櫃手や透彫などの染付磁器がある。

能野焼【よきの】

鹿児島県種子島の西之表市住吉の能野で焼かれた日用陶器。開窯については諸説あるが、18世紀初めに苗代川系統の陶工が来て始めたと思われる。砂鉄を含んだ胎土の無釉焼締と天然産粘土を釉に用いたものがある。明治35年閉窯。



鉄釉象嵌小徳利

個人蔵



黒釉貼付唐草文半胴壺

個人蔵



徳利

個人蔵



仙花器

個人蔵



灰釉鴨徳利

個人蔵



緑釉香炉

個人蔵



灰釉火入

個人蔵



灰釉壺

個人蔵



緑釉掛花入

個人蔵



緑釉蓋付壺

個人蔵



灰釉砂糖壺

個人蔵



灰釉置水指

個人蔵

丹波焼【たんば】

旧丹波国(兵庫県)今田町で焼造された中世から現代に至る陶器。茶入・花入などの茶陶を焼始めるのは他の窯より遅れて、桃山後期からのようである。江戸初頭には黒褐釉・赤土部釉が開発されて、施釉陶の時代が始まる。窯は中世の頃よりも北に位置して釜屋から立杭が中心となる。江戸後明には陶技も多彩となり、型押・釘彫・イッチン・鉄絵・自泥絵・墨流し・色絵などの様々な装飾法が開発された。

布志名焼【ふじな】

楽山焼と合せて出雲焼ともいう。鳥根県玉湯町布志名で寛延年間に開窯され、松江藩の命により安永9年楽山焼陶工土屋善四郎が雲善窯を創窯。文化13年には藩主松平不昧に召されて水原与藏順陸が開窯するが、当主の死とともに閉窯。幕末以後も民窯として今日に至る。

綱ヶ崎焼【ぼうがさき】

長崎市稲佐町の綱ヶ崎で、文政6年(1823)から蒲池秀吉(子明)が焼いた雅陶。製品は染付や象嵌の煎茶用具や筆筒など。嘉永5年(1852)閉窯。

波佐見焼【はさみ】

長崎県波佐見町で焼かれた磁器。染付のくらわんか碗をはじめ、青磁の日用雑器を生産した。現在も有田に次ぐ生産地である。



緑釉茶碗

個人蔵



染付字文煎茶碗

個人蔵



染付簞文徳利

中尾町立博物館蔵



緑釉笠徳利

個人蔵

亀山焼【かめやま】

長崎市伊良林町で文化4年(1807)年頃、長崎奉行の援助を受けて大神甚五平らが開窯。天草石を用い、各種の染付磁器を焼く。中国蘇州の土を使った蘇州土亀山や末期には赤絵も焼いた。いく度か断続はしたが、慶応元年(1865)閉窯。



染付山水文水指

個人蔵



染付魚山水文鉢

個人蔵



染付花字文水指

個人蔵



染付草花字文蓋物

個人蔵



染付山水文香炉

個人蔵



染付雲竜鶴編字文大皿

個人蔵

松代焼【まつしろ】

長野市松代町で文化13年(1816)に松代藩が殖産興業として開窯。昭和8年(1933)廃窯まで120年近く更埴地方の諸処に窯が出現した。鉄分の多い赤黒い地上を甌すため乳白色の失透釉をたっぷり掛けて銅緑釉を流し掛した日用陶器が主流。



鉄釉茶碗

個人蔵



灰釉茶碗

個人蔵



緑釉茶碗

個人蔵



灰釉茶碗

個人蔵



灰釉蕎麦茶碗

個人蔵



灰釉猪口

個人蔵



鉄釉乗燭(タンコロ)

個人蔵



鉄釉泉洗め

個人蔵



灰釉醤油入

個人蔵



海鼠釉味噌小甕

個人蔵



緑釉片口

個人蔵



鉄釉小鉢

個人蔵



海鼠釉小井

個人蔵



海鼠釉井

個人蔵



緑釉井

個人蔵



灰釉捏鉢

個人蔵



灰釉捏鉢

個人蔵



灰釉飯櫃

個人蔵



灰釉大皿

個人蔵



緑釉燗徳利

個人蔵



緑釉燗徳利

個人蔵



緑釉燗徳利

個人蔵



灰釉燗徳利

個人蔵



緑釉徳利

個人蔵



松代織部大徳利

個人蔵